

# 小学校教員の実務経験を活かした大学の授業に関する研究

## —A 大学教職課程の学生を対象に—

仲 井 勝 巳

(教育学科講師)

小学校の実務経験を持つ大学教員が、教職課程の大学生に対し、その経験を活かして授業（理科・理科教育法・小学校教育実習・教職実践演習・ゼミ）を実施した。その結果、大学生は、理科の観察実験、安全指導、指導案作成、小学校教員や児童の視点を持ち、学級経営と教科指導の重要性に興味を示し、教職について考えることがわかった。そして、4年間の授業実践を基に、教職課程の大学生と実務経験を持つ大学教員の関わり方の概要を示した。

キーワード：大学教職課程・実務経験・小学校・教科教育・学級経営

### 1. はじめに

小学校の実務経験を持った大学教員は、その経験をどのように大学教育で活かすことができるのだろうか。前田（2024）は、実務家教員による教職大学院の授業実践から、実務家教員が意識して取り組んだ内容が受講生にも伝わっていることを捉えたものの、具体的事例の紹介にとどまり、知見を理論化し一般化した上で適切に教授できるまでには至っていないことを指摘した。また、現職教員と学部新卒学生のグループワークを何度も取り入れることで形骸化し、お互いの特性を活かした討議となくなることやグループワークによってどこまで院生の学びが深められたかについて検証が必要であることを示した。仲井（2022）は、コロナ禍における大学教職課程の授業事例（理科・理科教育法）を紹介しているが、教職を目指す大学生へ、具体的に実務経験がどのように活かしたのかを示していない。

これらのことから、教職大学院での実務経験を活かした大学教員の授業事例はあるものの、大学教職課程における実務家教員の授業事例で、各学年の教職課程科目（学校教育の教科指導、教育実習、ゼミなど）について、具体的な事例

が報告されていない。そこで、本研究では、大学教職課程において、学校現場の実務経験を持つ大学教員の事例に着目した。

なお、文部科学省では、専攻分野における実務の経験及び高度の実務の能力を有する教員を「専攻分野におけるおおむね5年以上の実務の経験を有し、かつ、高度の実務の能力を有する者」としている。そのことを踏まえ、本研究では、学校教員をおおむね5年以上を経験した教員を実務家教員と定義した。

よって、本研究の目的は、小学校の実務経験を持つ大学教員が、どのように実務経験を活かすことができたのかを整理し、大学生との関わり方について明らかにすることである<sup>1)</sup>。

### 2. 研究の方法

A大学の教職課程に関する授業（理科・理科教育法・小学校教育実習・教職実践演習・ゼミ）に着目した。2020年4月～2024年3月の期間、新型コロナウイルスの影響を受けた時期から緩和されていく時期の事例である。本研究の大学教員かつ授業者は、小学校の実務経験（10年程度）を持っている。そして、その実務経験がどのように活かすことができたのかを紹介し考察

していく。対象学生は大学1～4回生で各学年における学生の実態やカリキュラムを踏まえ、特に教師や児童の視点を持って学生が取り組めるように指導内容を工夫した。なお、児童の視点に関しては、理科の学習が小学3年生から始まるため、小学校低学年でどのような学び（生活科など）をしてきたのか、各学年の児童の実態を実務経験を基に紹介したり、学生の子ども時代を想起させたりして取り組んだ。

対象学生の振り返り<sup>2)</sup>やアンケートなどを取得する際には、個人が特定できないように倫理的配慮を行い実施した。

### 3. 結果と考察

#### (1)「理科」の授業について

主に大学1回生を対象にした「理科」の授業は、小学校理科の学習内容を取り扱い、観察や実験を取り入れて展開した。この授業では、主に小学校学習指導要領（平成29年告示）を活用し、小学3～6年生の理科、目標、A・B分野、内容を紹介して取り組んだ。実際に小学3～6年生の理科の授業内容を指導した経験を基に、各分野や内容を具体的に挙げていく。

例えば、安全教育を意識させるために、マッチやアルコールランプの使い方の例では、「みなさんは将来指導者になって教えるという視点を持って取り組んでください。」という言葉かけをすると学生の集中力は上がった。このように、教師の視点を持つことを意識させて授業を行うと、学生の反応が良かったと思われる。学生が授業で学んだことを毎回の振り返りシート（図1）で具体的に振り返られるように工夫した。そして、観察カードを使って指導する際の配慮について、学生は振り返りをしていった。これは、絵をかくことが苦手な児童に対して、色、形、大きさ、手触りなどの情報を言葉やキーワードで絵に付け加えたりすることで、わかったことや気づいたことを表現しやすいように指導すると良いことなどを紹介したからだと考えられる。実際に、観察や実験を体験しながら、子ども達にどのように指導するのかを考える際に、実務経験を紹介することで、学生達の学びは深まる

といった事例である。

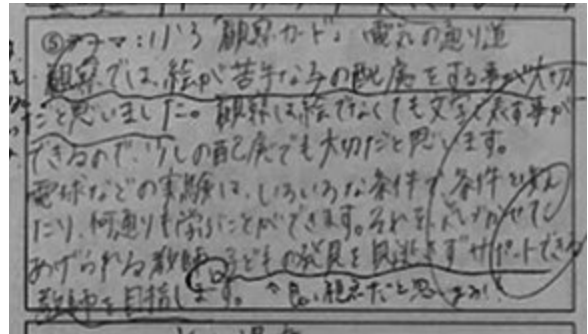


図1. 学生の振り返りシート

また、小学校の夏休みに自由研究（図2）という課題が出されることを紹介し、実際に子どもの視点で自由研究を挑戦する気持ちで学生に取り組ませた。そして、自由研究で良かったところを付箋で貼り、多く付箋が貼られた学生に、全体でどのように工夫するのかを発表させた。この一連の流れに、付箋で友人の自由研究にコメントをする際に、必ず班で行い、他者から1枚以上のコメントをもらう機会を作ってから全体の自由研究を見てコメントをする場面を設定した。その理由として、これが小学校であれば、もし始めからクラス全体で付箋でのコメントをしてしまうと、友達から全くコメントをもらえない児童が出てしまうことが起こる。それを避けるために、必ず班で行ってから取り組むと主体的・対話的な学びになることを学生に説明を加えた。また、始めの班で行う付箋と全体で行う付箋の色を変えることによって、見分けがつくことも紹介した。その結果、学生達は自ら自由研究を行い、他者による付箋のコメントをもらうことで、客観的な評価を得ることに満足するという、実際の現場を体験しながら取り組むことができたと考えられる。

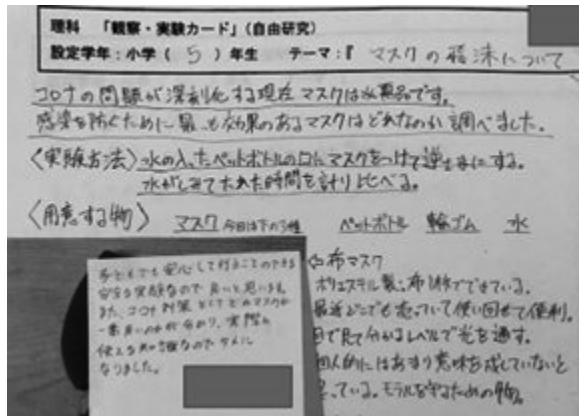


図2. 学生が取り組んだ自由研究

「理科」を受講した学生の振り返りで、次のような回答（抜粋）を得た。

- 「授業を行うにあたっての予備実験の大切さ」
- 「理科の楽しさ、安全を意識する大切さ」
- 「教える上での気をつける部分や理科の内容など」
- 「子ども達にどのように教えればいいのか(実験の過程や結果等)」
- 「実験をする時に怪我や命に関わるので注意すべきことと、どんな風に授業を進めるのか学べました。」
- 「ただ理科について学ぶのではなく、教える立場からの理科についても学ぶことができました。」
- 「指導する時の安全面や伝わりやすい指導の仕方など学ぶことができました。」
- 「毎回授業が楽しかったです！理科の楽しさがより先生のお陰で分かりました！」
- 「分かりやすく、実験も楽しかったです」
- 「子供と接するにあたり、子供の視点や子供がやりそうな事を予測し危険がないように授業を進めること。授業をするにあたり、比較する事を忘れずにする。ということを学びました。自分が小学生の時のことを思い出せました。」

これらのことから、特に理科の授業では、予備実験や安全指導、授業内容の展開に関して振り返ることがわかった。また、理科の楽しさ、見方・考え方(比較の視点)、予備実験の大切さ、児童の視点を持ったり、指導者の立場を意識したり、学生が子ども時代のことを想起して取り

組んだりすることがわかった。

## (2)「理科教育法」の授業について

主に大学2回生を対象にした「理科教育法」の授業は、「理科」の授業で学んだ内容を基に指導案を作成して模擬授業を行うことになる。小学3～6年生の理科、目標、A・B分野の内容を把握した上で、学生は指導案を作成する。そして、班や全体で模擬授業を行い、取り組んだことを振り返り、より良い授業の構築になるように試みた。学生は、理科を指導する時に、どのようなイメージを持っているのだろうか。あえて、教員側から詳細を伝えることなく、第1回の授業時に、班で考えて整理し発表させた。ある班では、各自の出した意見を基に話し合った結果、「安全」「楽しい」「授業づくり」「生活に活かす」「協力」というカテゴリーに分類した(図3)。

また、主に2回生を対象とした理科教育法の授業では、1回生で学んだ理科の授業内容や子ども時代のことを想起させた上で、どのように指導していくのかをイメージを持つことができたのではないだろうか。付箋を使って、各自の考えを示し、班で話し合い、模造紙等にカテゴリー分けを行う取り組み方は、実際に、小5理科「流れる水のはたらき」の学習で洪水からどのようにして身を守るのかといったテーマを取り扱う際に、ハザードマップの作成で活用した事例を紹介した。その結果、学生自身が教師になった際、このような指導を取り入れたり、学校現場のように付箋を使って体験したり、工夫したりすることで、その方法を知り、活用していくことが考えられる。

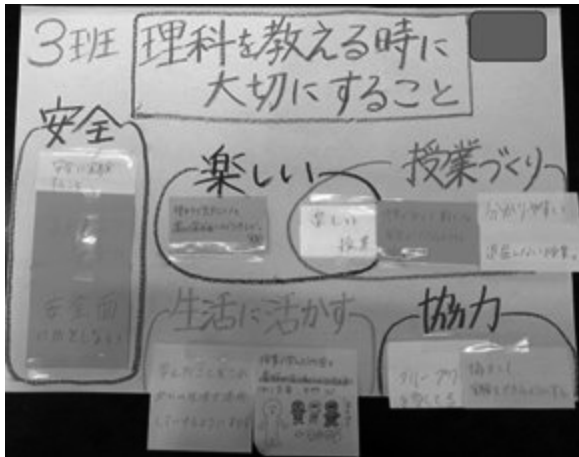


図3. 班でまとめた資料

特に実務経験が活かされたのは、指導案作成の内容である。指導案作成では、児童観、教材観、指導観について書く際に、具体的に事例を紹介した。工夫として、学生の子ども時代を想起させた上で、各学年の児童観を書くことと良いことに気づいたのではないだろうか。教材観では、教材の特徴（単元を通しての学び）を学生自身が把握しているのか、そして、指導観では、児童にどのような力をつけたいのか、理科の見方・考え方を使って、本時の目標をどのように達成していくのかを持たせるようにした。

「理科教育法」を受講した学生の自由記述の振り返りから、次の回答（抜粋）を得た。

○「理科教育法の授業のおかげで指導案作成の自信ができました。このことを活かして実習も頑張ります。」

○「グループワークでの指導案作成がとても楽しかったです。」

○「指導案を書く力と授業力をもっとつけていきたいです。」

○「模擬授業を通し、フィードバックをしっかりと頂けたので、自分がどこが出来なくてどこができていたのかしっかりと理解することが出来ました。また、もっとこうすれば良かったという後悔ができた為、今後の課題を見つけることが出来ました。」

これらのことから、指導案を作成する力や授業力をつけたいと思う学生がいることがわかった。指導案作成に関する回答をした学生は、お

そらく、この大学教員が、「指導案を書くということは、教師としての力を試されていること、すなわち、児童観では、子どものことをしっかりと観ることができているのか、そして、教材観では、どのようなことを教えるのかを教師として把握して、理解しているのか、さらに、指導観では、児童観と教材観を踏まえ、子ども達にどのような力をつけたいのかということ、教師は把握して取り組むことが大切である。」ということをお話しており、この学生は、そういった話を意識して、指導案作成に臨んでいたのではないかと推察される。また、指導案を作成後、実際に模擬授業をした際に、実務経験を踏まえたフィードバックを行うことで、学生が今後の課題を見つけ、振り返ることにつながったと考えられる。

なお、新型コロナウイルスの影響を受けていた時期では、オンライン授業を取り入れた。対面授業でもマスク着用、ソーシャルディスタンスを確保して取り組んだ。オンライン授業では、学生が実際に観察や実験をすることは困難であったため、映像教材を活用したり実務経験を話したりすると、興味関心を持って取り組む様子があった。特に、小学3～4年生の理科指導において、実際に指導したことのある実務内容を紹介することによって、学生自身がどのように授業をすれば良いのか、自分達が小学生時代に受けた授業を思い出しながら、授業に臨むことが見られた。そして、指導案作成の際には、オンラインでありながらも模擬授業（このように授業を展開するという説明を含めて）を行い、コメント欄を活用し、他者との学び合いを基に、取り組むことができたと考えられる。

### （3）「小学校教育実習」の授業について

主に大学3回生を対象とした授業で、「教育実習で、楽しいこと、不安なこと」について事前に実施したアンケートから、次の回答（抜粋）を得た。

○「実際の小学校現場に行って、たくさんのことを学びたい、児童が楽しい、分かる！と思うような授業をしたい、そのためにたくさん準備

して実習に臨みたいと思っはいるけど、半分不安もあります。自分が学んでいた教室に、教師という立場で行くこと、児童と過ごすことがとても楽しみです。今は不安が大きいけれど、まだ実習まではあるので、頑張った分自信につながって頑張れると思うので精一杯頑張ります。」

○「正直、全てが不安で、楽しみな気持ちがない状態です… 自分が本当に授業ができるのか、事前指導でお話はできたが、どうしたら良いのか自分でも分からないです。とにかくとても不安です。」

○「実際に子供たちと関わりながら実習が出来るのはとても楽しみです。やはり、研究授業がしっかりと行うことが出来るのか、先生や児童と信頼関係を築くことが出来るのかといった不安もあります。ですので、実習ではしっかりと準備や心構えをもって取り組みたいです。」

これらのことから、実習に対して、児童との出会いに楽しみを持つ反面、実習そのものや授業を行うことに不安を持つことがわかった。そして、事前指導において、実務経験を持った大学教員が学生の模擬授業を見て、随時メモした板書(図4)である。「授業づくり(学習指導)」の内容で、小4算数、小4社会、小5国語、小5算数、小6社会の教科などに対して、適宜、現場の意見を踏まえながらコメントを行った。

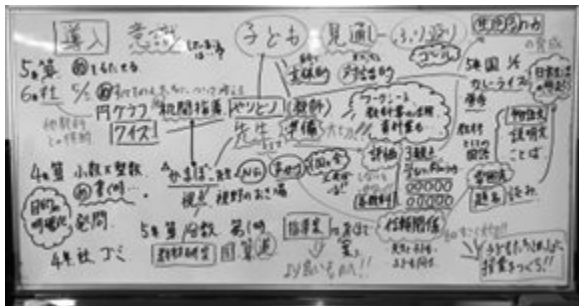


図4. 模擬授業に対するメモ(板書)

事前指導の授業を終えて、学生から振り返りを取得したところ、次の回答(抜粋)を得た。

○「〇〇先生の子どもと教師の関係性の話や、実際の子どもたちの事例などを聴くことができ

とても勉強になった。自分は本当に実習に対して不安しかなく、楽しみ、期待の気持ちがなかった。しかしそれは「授業どうしよう」「この時はどうしたら良いのだろう」と見えない先のことばかり考えていたからかな、と感じた。もちろん授業を考えることも大切であるが、まずは第一に子どもたちとの信頼関係を築くこと、楽しく過ごし、この先生なら大丈夫だと思われるくらいに関わりを持つことが大切であると学ぶことができた。そして、先生がみんなと話す時間を設けてくださったおかげで、色々な話を聞くことができた。みんなが不安に思っていることや、実習に向けてどんな準備をしているのかなど情報収集ができたと共に、不安に思っているのは自分だけではなかったと少し安心した。自分は本当に不安、心配性で、物事をマイナスな方向にばかり考えてしまうのだが、実際の現場や子どもたちの前に出た際、子どもたちには教師の不安はすぐに伝わってしまい、子どもたちまで不安になってしまう。自分が不安でも、子どもたちにはそれを感じさせない演技をすることも必要であると学び、自分がもしそうってしまった時、対応できるようにもなろうと思った。18日間は今は長く感じるが、実際にはじまったら内容が濃く、色々なことを学び、あっという間に終わってしまうと思う。そのため、一日一日を大切に、確実に自分の力にして、先生や子どもたちとの関係を築き、素直に、誠実に、謙虚に、一生懸命に、楽しみながら頑張ろうと思った。」

○「授業前半の振り返りとして、実習において最も山場であり、最終地点になるのが研究授業であると思うが、それに向けてまずは実習初めのつかみで児童にとって関わりやすい、面白い、仲良くしたい、優しくするなど良い印象を与えることが重要であることが分かった。先生はけん玉の例を挙げていたが、私はけん玉ができないので、それに代わる何か良いものがないかと考えてみたい。これに関しては、実習だけでなく、教員になったときにも学級開きなどで用いることができると思うので、何かネタを持っておくと良いと思った。また、教材研究や授業研

究、授業づくりなどは当然大切だが、それ以上に、いかに児童と関わって信頼関係を築くことができるかというのが大切で、実習でしか学ぶことのできない内容であると思う。そこで、授業後半の振り返りでは、児童の個性として名前と顔を早く覚え、たくさんの交流をすることを実践したいと思うが、その際に、わからないことや不安なことがある中で、こうしなければならぬと必死になりすぎるのではなく、人と人とのコミュニケーションとして、挨拶や会話を明るく、楽しく、朗らかにやっていくように意識することが大事だと分かった。そのため、児童が心情を読んでくるように、こちら側も児童を知ろう、仲良くなろうという前向きな気持ちを持ち、時にはオーバーリアクションをしたり、褒めてあげたりして、最終地点である研究授業を活気あるものへとつなげていきたいと思う。」

これらのことから、事前指導を受けて、学生同士、不安を共有し、児童との信頼関係を築くために関わり方を工夫しよう（けん玉の例を見て）という心構えを持つことがわかった。特に、授業づくりも重要であるが、児童との信頼関係の構築をより意識する傾向があると考えられる。

学生が教育実習を終えた後、事後指導の授業で「学級経営」や「生活指導」の内容を取り扱った。ここでは、小学1～6年生の事例（図5）を紹介し、班活動で話し合って発表を行った。

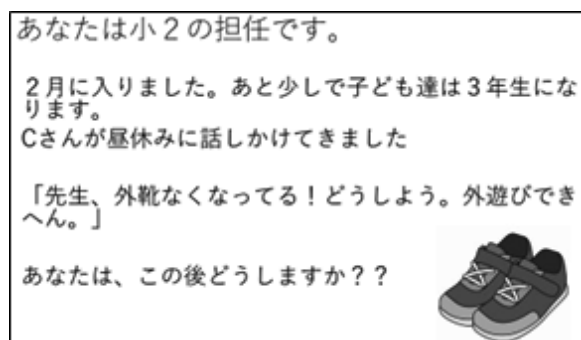


図5. 授業資料の一部(事後指導)

事後指導の授業後に、学生の振り返りを次の回答（抜粋）を得た。

○「事例であったように介助の必要な子がいたり、問題があったりする時には、特にたくさん

の人に頼って、よりよい学級にできるように努める必要があると思った。教師は人と人の関わりによってできるので、人間性も大事だし、相性が合わなくても目標を統一していくことが大事だとわかった。」

○「各学年における学級経営のポイントを押さえながら、多様な問題点に応じた対応力が教師には必要とされているとわかった。また、学級内での教師と児童の信頼関係の大切さも実感した。学級経営は、教師の工夫などの対応力といった力量が現れやすいと思った。」

○「実習で入った学年であったこととどういう子どもがいるかがわかっているので選びました。実習でも事実とやったことの理由を十分に聞く先生方の姿を見て、話を聞く重要性を感じました。事実確認の仕方や解決の仕方を考えました。」

○「今回の授業では、生活指導について事例を通して学んだ。そこでは必ず管理職、学年主任に報告連絡相談をし、当人に事実確認をすることが重要だと思った。」

○「トラブルにおいて管理職に報告し、直接対応することが大切だと感じた。また、必ずしも解決するものではないということを理解した上で対応することが必要な場面も出てくるのだと思った。」

これらのことから、学級経営や生活指導において、教師の指導力（対応力）や子ども達との信頼関係、管理職や同僚の教員との連携が重要であることの記述が確認された。学生達は実際に教育実習を終えているので、「学級経営」や「生活指導」について実習で体験したことなどを踏まえて考えることができたのではないだろうか。

#### （4）教職実践演習について

主に、大学4回生を対象にした授業で、オムニバス形式となっており、「理科と安全」というテーマで、観察・実験を取り入れた内容を実施した。そして、学生の振り返りを、次の回答（抜粋）を取得した。

○「今回の学習では理科の実験の際の注意点や事前実験の大切さなどを学ぶことができました。

班活動でポップコーンやべっこう飴を作る際に実験器具の危険な使い方や怪我をしてしまう箇所などを実際に身をもって体験することができてよかったです。」

○「観察・実験を通して、理科の様々な活動には楽しさだけでなく、危険もあり、そして学びがあるということを改めて学ぶことができました。これらはどれ一つ欠けてはならないものです。活動をただやるのではなく、そこに友達や教師との協力や、理科という不思議を味わう楽しさ、危険なものへの対応力・判断力、そして生きる力につながる学びを共存させること。今回の講義、また4年間で学んだ理科の教育法をこれからの人生の中で生かせるよう、一人の大人として子どもたちのために力を尽くしていきたいと思います。」

○「実験を行う中で、手順がわかっていたほうが安全に実験をしやすいと思いました。みんなと学びを共有できて印象に残る授業でした。教師と児童生徒との方向性の違いは怖いなと思いました。児童生徒への思いを自分だけ募らせるのではなく、児童生徒に信頼されるように頑張っていきたいです。」

○「○○先生の久しぶりの授業とても楽しく感じました。また、ポップコーンやベッコウアメの実験は大学生でも楽しいです。きっと子どもたちはもっと楽しみながら実験をするとおもいました。○○先生から教えていただいた安全管理、子どもとの付き合い方を忘れずに来年度教壇に立ちたいと思います。」

○「4年間、理科の授業を中心にお世話になりました。理科だけではなく、教師としての姿、先生のお話から学ぶことが出来ました。ありがとうございました！」

これらのことから、大学4回生の授業では、主に教員免許を取得予定の学生が多いことから、既に大学1～3回生時の授業に関わった経緯を含め、理科の授業では、観察・実験（ベッコウアメなど）の楽しさや安全指導の重要性を示す回答が多かった。また、大学教員に対して感謝を示し、児童との信頼関係・付き合い方、教師としての姿について書かれていることもわかっ

た。おそらく、そのような回答をした学生は、この大学教員が学級経営や教科指導（理科）について、学生が想像しやすいように説明を加えたことが要因だと考えられる。

#### (5) ゼミについて

ゼミ（卒業研究含む）では、将来、教員を目指す学生もいれば一般企業を考えている学生など、多様である。基本的には、学生の夢や目標を知り、支えるのがゼミ担当の役割だと考えられる。もちろん、卒研（論文）を仕上げることも重要であるが、特に学校教員を目指す学生に対しては、実務経験は大いに活かされる。小学校の実務経験は、学級経営、授業研究（理科・生活科・特別活動など）、家庭・地域連携、教職員の連携などを紹介すると、学生は興味関心を示した。そして、学校教育に関係する内容のテーマを選び、自ら取り組む姿勢が見られた。

例えば、小学校の宿泊行事や校外学習で、林間学舎や科学館や動物園などに行くことがある。実際にゼミで動物園を訪れ、林間学舎で宿泊するような施設で合宿を行い、学生が教師視点（児童視点も含む）で、安全に引率するにはどうすれば良いのか、子ども達を集合させるために笛の吹き方（「あつまれ」という言葉を想定し、笛を4回吹くなど。）をどのように工夫すれば良いのかを想像し、他教科との関連、児童への事前・事後学習の工夫、自然体験学習などを考える機会となった。図6は、小6理科の燃焼に関する内容で、どのようにすれば薪に火がつき、よく燃えるのかという視点を持って取り組んだ。

また、博学連携において、学生の中には、個別で博物館を訪れて、学校教育との関連性について調べる姿勢が見られた。このようにゼミで、校外学習を取り入れることで小学校の事例を紹介しながら、教師や児童視点を学生に持たせ、実務経験を具体的に紹介することは効果的であったと推察される。その他、昆虫食やスポーツ関係に興味を持ち、研究テーマを設定する学生もいた。そのテーマに合わせて、学校現場の視点を含めて、教師の視点や児童の視点を持って卒業研究に取り組むことができたのではないか

と考えられる。



図6. 薪に火をつけるには？（ゼミ）

このようにして、ゼミでは、学生の主体性を尊重しつつ、実務経験を活かし、教職（時には一般企業なども）と関連させながら取り組むことで、学生の将来や夢に寄与するのではないだろうか。

#### （6）教職のイメージを学生に持たせるための工夫について

大学1回生は初学者で大学生活に慣れることから始まり、漠然として小学校の教員は何をするのかを想像していく。大学2回生は1回生の学びを踏まえた上での学びを展開していく。大学3回生は教育実習の前後において学生の教職の心構えが変容していく。大学4回生はこれまでの学びを踏まえ、卒業後の進路（学校教員やそれ以外も含め）を考えて取り組むことになる。各学年において、学生自身が大学4年間で様々な体験（クラブ・バイト・交友関係など）を積むことで人間性が育まれていく。様々な体験を通して、コミュニケーション力をつけたり、社会人としての心構えを学んだりすることがある。

そこで、大学1～4回生に対して「小学校の教員のイメージは？」という授業資料（図7）を紹介したことがある。特に学級経営や教科指導は重要で、車の両輪のような存在であり、子どもの発達段階や特性を知って、教科の指導法を考えることの説明を加えた。また、授業だけではなく、行事、保護者対応、校務分掌、地域社会、同僚や管理職とのチームワーク、関係機関との連携など、仕事は多岐に渡ることを紹介し、学生は、小学校教員の仕事は授業だけではない

ことを知る。その上で、限りある時間の中で優先順位を決めて、仕事に取り組む能力が必要になってくる。そのような力は、この大学生活に備えることができるといえる。そのため、学業以外に、クラブ・バイト・交友関係など、様々な経験を積んだり、達成感を得たり、課題を解決したりした経験が将来教員に就く際に活かされることを学生に伝えた。結果、学生は大学生活をどのように過ごすのか参考になったと推察される。時として、学生は教員採用試験のエントリーシートや面接の際、学生時代に打ち込んだ内容を紹介することを知ると、教職のイメージを持ちやすい傾向にあると感じられた。

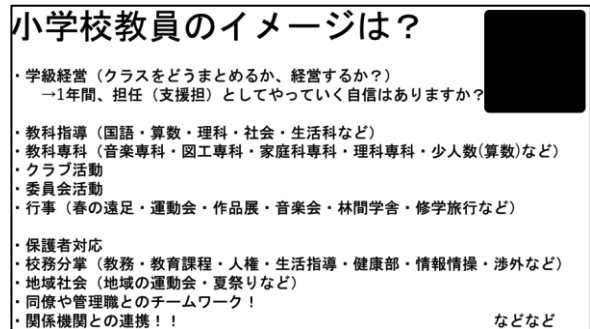


図7. 授業資料の一部（各学年の授業で）

教職課程の授業では、教員免許を取得する学生が受講することになっているが、必ずしも全員が教職に就くとは限らない。学生が職業を選択する1つの中に教職があるということを認識し、大学教職課程の授業に臨むことも重要である。仮に学生が一般企業に就職したとしても、その後、教職に転職する可能性がある。そのため、いずれ教職の思いが芽生えた時に備えておくことを助言することも肝要ではないかと考えられる。

以上のことから、学級経営や教科指導について実務経験を活かす際に、学生が大学生活で様々な体験をするような内容と関連させて紹介すると興味を持ち、人との関わり方、仕事の捉え方に向き合うのではないだろうか。また、大学1～4回生にかけて、色々と経験を積んでいくとされるので、クラブ・バイト・交友関係などの事例も学生の実態に応じて紹介するのも良

いだろう。近年、教職を目指す学生が減少し、採用試験の倍率も低下している自治体もある。せっかく教員になっても、多忙を極め、体調を崩してしまう場合もある。教職に期待や不安を持つ学生が一定数いる中で、教職に希望を持てるよう、学校教員の良さ（心構えも）を伝えることが実務家教員の役割だといえる。

#### 4. 総合考察と今後の展望

本研究は、主に大学1～4回生の授業において、小学校の実務経験を持った大学教員による事例を基に考察し、整理してきた。しかし、これらの事例は、4年間に取り組んだ複数における授業のうち、教員や学生の振り返りを基に概要を踏まえての考察である。そのため、該当科目の授業において、具体的な事例を詳細に紹介し、考察するまでには至っていないことが指摘される。そのことを踏まえた上での事例として、本研究の総合考察を、次のように行う。

小学校の実務経験を持つ大学教員が教職課程の授業を行うと、大学生が小学校の授業づくりを考え、理科の観察や実験、安全指導、指導案作成を考察し、教育実習にする心構え、小学校教員や児童の視点を持つことがわかった。特に、学級経営と教科指導に関しては、大学1～4回

生の実態に応じて授業内容を工夫し、教職に対するイメージを丁寧に紹介することが大切だと考えられる。また、校外学習や合宿などを取り入れることで、学生が教職に対する見方、考え方を持つことを示した。これらのことから、前田（2024）が示した実務家教員が意識して取り組んだ内容が受講生（本研究では、主に大学生を対象）に伝わっていることも類似している。しかし、本研究は、大学における4年間の教職課程に関する授業や教職を意識している学生を対象とした実践に独自性を持つことができたのではないだろうか。その4年間の実践を基に、大学生（教職課程）と大学教員（実務経験あり）の関わり方の概要（図8）を整理した。

この図8より、学生の夢・目標（教職やそうではなくても）を実現させるために、実務経験を持った大学教員は、その経験を各学年や学生の実態に応じて活かしていく。そして、大学の授業以外において、学生自身が様々な経験（クラブ・バイト・交友関係）を積むことで、豊かな人間性が育まれる。その経験を教職に活かせることを期待を学生が持つことが重要ではないだろうか。豊かな人間性を持つ学校教員がいることで、将来出会うであろう子ども達に、「学びに向かう力・人間性」を育むことに寄与するのでは

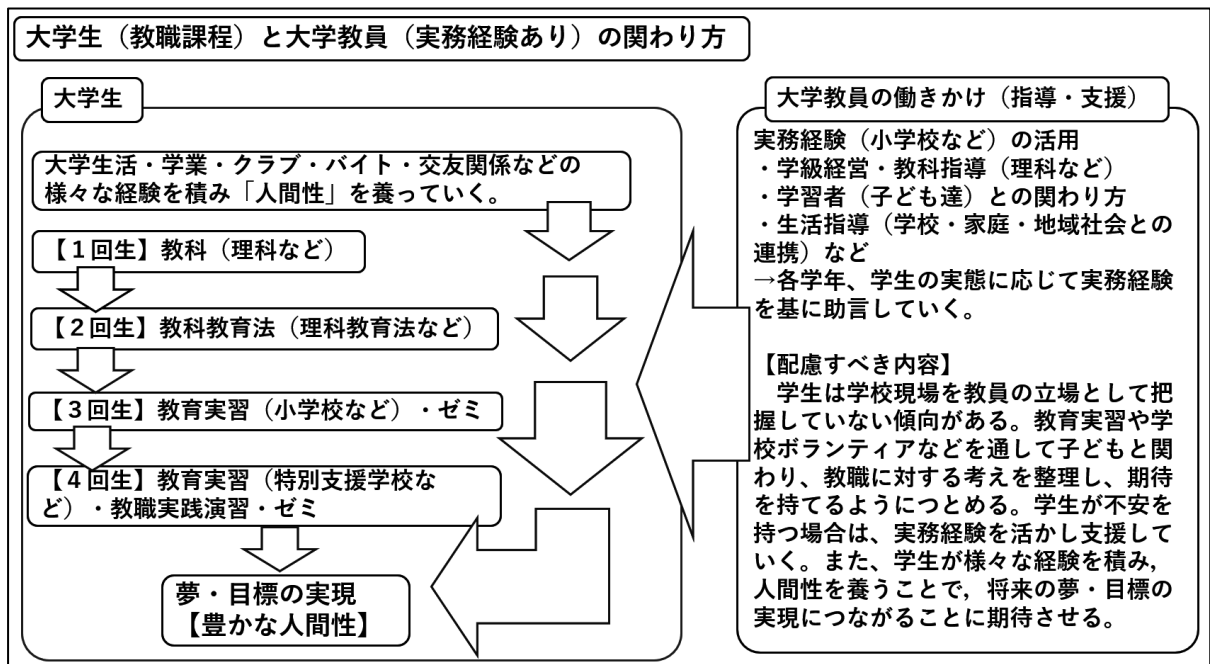


図8. 大学生（教職課程）と大学教員（実務経験あり）の関わり方の概要（筆者作成）

ないだろうか。そして、学級経営や教科教育、子どもとの関わり方、指導の仕方に活かしていくことを期待したい。この図8は、主に教職課程に在籍している学生と実務経験を持つ大学教員の関わり方に着目している。今後、さらに具体的な関わり方の工夫については、大学生の実態や多様な実務経験を持つ大学教員によって展開されていくことになる。

今後の展望として、次のことを挙げる。実務経験を持つ大学教員の授業を受けた学生が卒業後、どのように学校現場で活かしているのかを明らかにすることである。追跡調査をすることで、その実務経験の活かし方を再検討する必要がある。理科などの教科指導、子ども達との関係を築きながら取り組む学級経営など、大学で学んだことが、実際にどのように役に立っているのだろうか。そして、それらを明らかにし、作成した図8を改良することで、実務経験を持った大学教員による大学生との関わり方、指導のあり方がより妥当に、一般化されていくことになる。

また、本研究において、実務家教員は5年以上の実務経験を持つ大学教員と定義したが、その年数に満たなくとも、実務経験を持つ大学教員は一定数いると推察される。そのため、そのような5年に満たない実務経験を活かした大学教育はもっと多様にあると推察される。年数に関係なく実務経験を持った大学教員の授業事例をさらに明らかにすることで、大学教育の質の向上が期待されるだろう。

さらに、本研究は、小学校の理科および理科教育法、教育実習関連、ゼミに関して論じてきた。もちろん、他校種、他教科の教職科目についても、実務経験を持っている教員であれば、大学教職課程で同様に取り組むことが期待できる。その観点も含め、たとえ5年未満で学校教員の实務経験であったとしても、実際に学校の子ども達へ指導した経験があれば、その経験を大学教職課程で活かすことができるといえる。そして、学生が興味を持って授業に臨み、教職への道をどう進むのかを考えることが期待されるのではないだろうか。

## 注

- 1) 本稿は、仲井（2024）「大学教員の实務経験を大学でどのように活かせるのか？」（日本科学教育学会第48回年会）とNAKAI（2021）「Research on Independent Study of Elementary School Science : For University Students Aiming for a Teaching Profession」（Program and Presentation Summaries for JSSE 1st Mini Conference Conducted in English 2021）、仲井（2020）「大学の理科ゼミに関する考察—オンライン授業と対面授業の試みから—」（日本理科教育学会近畿支部大会）で発表した内容を整理し、大幅に加筆・修正したものである。
- 2) 学生の振り返りにおいて、大学教員が実務経験を活かした授業を受けての記述や筆者が重要であると判断した記述の内容に関しては下線を引いた。なお、約4年間における該当授業の実践であるため、学生の振り返りや授業記録は多く、すべて紹介することは困難であるため抽出して論じている。

## 引用文献

- 前田利幸（2024）「教職大学院において実務家教員が果たす役割—教職大学院での授業の実際を通して—」滋賀大学教育実践研究論集（6）141-147.
- 文部科学省 HP, 「専攻分野における実務の経験及び高度の実務の能力を有する教員」  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/attach/1416202.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/003/gijiroku/attach/1416202.htm)（2024年12月20日確認）
- 仲井勝巳（2022）「大学教職課程「理科」及び「理科教育法」の授業に関する研究—新型コロナウイルス影響下の取組から—」, 尚美学園大学総合政策論集（34）35-48.